

報枕

繪本四季物語

前篇

五

913.5

工

前編 5

報仇四季物語前編卷之五

東都

振鷺亭主人

著

第十回

噪峰檢校綽趣して劇場を説
艶之佐奇出て江湖上を玩

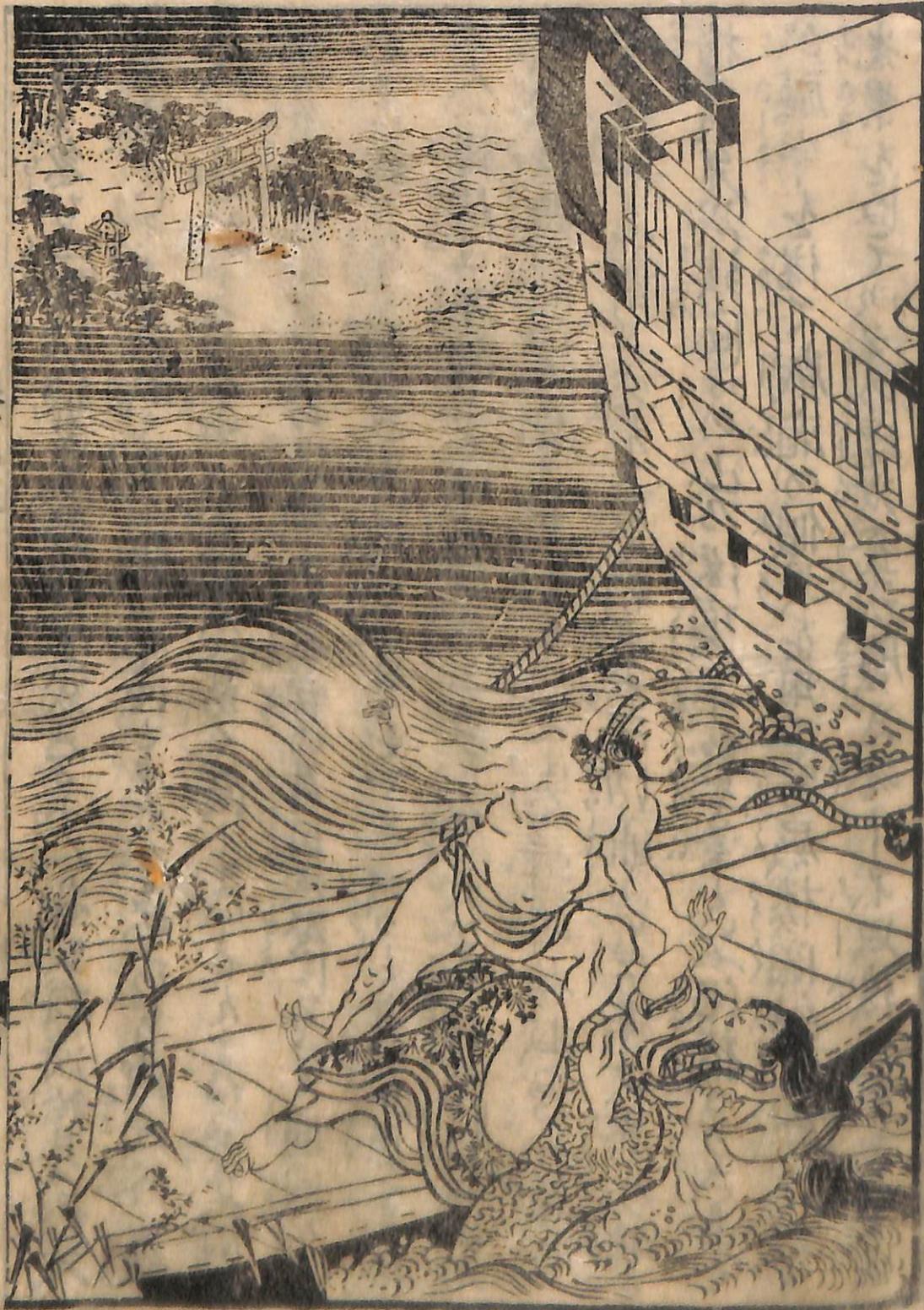
去程さきほど舟進ふねすすむの海上うみの上潛出ひそかにでるその夜そのよ千里せんり成艫なりかたて洋中やうちゆうの泊とまり翌日あした又早またはや
天あま小こ風かぜ吹ふ舟ふねを走はせまるる其その日ひ月つき暮くるる及およて大回おほくわいの湊みなと小着こぎはきます
弦ひなるる再また彼舟かのふね古陸ふるく小こととりりていいろろめめををぬぬ路ちみちのの唯ただ舟底ふねそこ小伏居こふしゑて九波路くわはろの
十雲じゆん不ふとと来きりりをを日ひささままむむ我身わがみいいろろととばばくく漂泊ひょうぱくしてある處あるところに到いたり
又またををややいいろろるる辛からきき目めよよ遭あひひつつるる事こととと只ただ顧嘆こぼれををおおろろすす處ところに
急いそ小許こまご多おほ乃人なひと来きりりて路ちみちにに一頂いつていとうの轎子こしをを擡たげげせせ海道かいどう小出こでてて去さるるがが忽たちち

一掃美々敷土庫造の大夏高堂より出て而ち轎子を去園は昇す人あり
 新も廻り許きの養婢を出邀く路に或轎子の内より杖出で扱扱と脱し
 奥より付ひきかき世路路にひらひらと走りて舟路に碎てや人心
 比もろくお例く息も涙もたじへ養婢急よ醒薬服用して中小灌全
 漸々小甦醒せさあく小房より路にハ此妙業成服すると心とと忽神人
 洞よりて天明るをどく次覺て眼次完て四下成看の以惣てこは家富公の
 豊なる光景も歴々の第宅と違く廳の方に小教本の根柢を熟して光
 恰も白晝のどく時小又素袍小鳥帽子引てくる一個の官人出来り
 路に杖も能く上の方小坐成儀と懇懇小礼を込てくるハ吾子怪
 後よりぬま某が面成看識ありヤ否と問小路にハおまいうる人なま
 事と此官人の面とつくとはにぞ忽ち大い小孩て同て去るハ一箇の

州身老女小若やら是親に是比は急難成救ひけり此方小をらすヤ
 彼官人嘆て去いふも某の附捕師萩三といひハいり実ハ是
 萩野彌三郎伊三といふ者なり又揚子船を倣造る世ハ元来我が
 船の舟士小て吾子成此處小邀まひせんなるにむや心易はびハ
 小と相列小田原はて澤田艶之依が第宅なり只今その明白とせ
 中さんとて左右小論じて正面に韓紙戸成さると用せり此附路にハ微
 眼成用て空窺ひるふ中央小相貌堂々たる一個の美夫ま倣然して
 着坐はぬぬの粧束厳小美麗なる座の傍ふ又一個の儉技帽子と
 裁き道服を被るが整整として併居る路にハなをも大光乃下
 在てつとくと那人の面を看る小正小と驚く依るにハ一般の孩き一
 般の喜びて只大の小呆れをけりハは驚く依咲成ぬく路に小向く

なるいふ其の前日の越え佐との相違はさやたこと不審なる倡や
 その後故文説く詳小脚申さんとて去る年二月己の廿日あり
 まん相列江島小おねて其にじり吾子成相見より互は笑用なりぬ
 志成運びかじつとも尚吾子が真の心中計さんか為さてこと才と運
 金澤小いりて百塚公小奉仕はるハ我がかたより愛ききせを彰さん
 があまほに我身より百折千磨の艱難ともいと危窮小運の存亡
 臨てといさう列女の節成推さじ東一を駕と鑿定て我が悦は後さ
 所ありと頻り小後嘆はるハ路にえ来孝翁の才子なる由洲附大の小
 悟りて忽ち林のきん地とてさるふても君はまさしく朝夷奈の切通
 おおて絨のなる小うせさせ給ひるが今日の對面さらは不審小なるなりと
 小籠と依微笑くさるハその時其血成吐く死に」と見しハ驚て萬の

汁成は小合てまを吐吾子成敷きたるのと君と我と金成と地を
 一と乃始あり今日乃對面にある迄吾子と怖とは車ハすくこは夢中
 の空まめてその膽を細あひハ心成櫻はを貞姪いふと看脱んが有
 各くと句當て如出一成戲をばはつるいよく件々を語あじてを後批
 成見せ申さんといまぶさもるさるふ彼角熊男女川滝と助ゆるさ出て
 路にが常小踏踏てさるハ其金成小おねて死て相見はの世移るはさ
 元より某件の傳ふりて途中美姿の備して始終其身の後身小附陸
 中うちとハ志にりこにまづハ今日の吉辰万歳なりとぞ中なる路にをまめて
 滝と助小同てさるハたある時ハ其身成及よそ我と成救さんしてさる
 りありははなまを男女川咲て去今大平の時節其力ありとて
 争る櫻小人成誤中さんや只今明白をさせまいらば」とて堂と打拍



卷之五

忽ち二個人出きり路の道に逢ふ人物実様滑稽が二
 口を齎して去るハ我々前小張三李四と中て合次ふらる所所谷の敏
 小入るる皂隸とるゆゑハハの彼が心易く落しまいせんがなる其附の
 耳鼻鳥珠ハるる偽の送物そ着官の耳目が驚じらる通同なる
 今日ハ祇々全く瑕なき玉の好男ふるさどやと呵々と打笑ふ原こまは
 二人ハ俳優のお譚ふて此の説話小及て各々大い小真が怪しぬ附小
 彼檢校路に小向て去るハ某今日ハこま実の罽峰檢校といふ是日
 すは孫小も前日容を變て朝妻奈の切通小いり某又異人の袈裟
 扮て小身が袈裟造りの山乃後頂八十賢臺といふ洒落りさまで
 以願字を借て戲廂の假具を用て宮殿樓閣彩を耀きたる
 光景をばて小身の塊が棄集ひ臆が冷し不思佻の形勢とて

せりしる深山夜陸の末はじり実小異人などの窟よと別々とも甚
 怖まよやみ孫小も狂りうその時乃婦女等いそごし梨園の小且及雇ひ
 かなるる或ハ雷雨鳴動ふことりるはるるを歌吹其至の鳴物を用て小身
 の心成初し忽ち所樂小推入中成飛せ宙比波の砌小抄奔りしる
 小身のまま雲小捲揚りて大路小隊まこころ心地して夢幻の夢よ十
 方成其の孫小總たしハ毛眼成掩ふ計り果て又茅屋の内小身を投
 小指しがそ夜比怖しきものいそごるるまらんいさや三途河原相合法
 院これくと招きる小終て二人の者出きたりぬ路にハこまいさるる者そと
 小る小の一箇家乃内そ見とものもほりこまいふと大い小強く不
 彼焼ハ又路の小舎叙て甚ごゆるる家まかり驚く依は車情を看て
 喉をまらるる世老女ハ某ハ小法育の傳母とて由比波ハ平赤が在処りる吾子

小好新(笑)迎い。おとほの柳の枝の戯劇を忘れたる集(あはれ)
 実の老女もふとて三途河原の女家へははも仕渡るやうに
 小彼老女(おま)の面(おもて)に花(はな)を流(なが)してゐるのにおまの蛇(へび)も仕渡(わた)す
 八様(はつよう)の海(うみ)と陸(りく)とを蛇(へび)真(ま)中の小(こ)近(ぢ)年(ねん)奥(おく)本(もと)も仕(し)入(い)る
 食(た)もふもあつるものさうもとの時(とき)に批(ひ)ておまの用(もち)も仕(し)出(で)
 只(ただ)顧(顧)其(其)夜(や)の無(無)乳(乳)夜(や)籠(籠)皇(皇)路(路)に七(七)乃(乃)時(時)怖(おそ)るものも用(もち)も仕(し)出(で)
 牙(か)を磨(こ)いた夜(や)のうしろに小(こ)娘(ね)はる。今(いま)も小(こ)最(ま)娘(ね)の老(ら)女(にょ)も
 へんと面(おもて)を看(み)る小(こ)彼(か)老(ら)女(にょ)も又(また)面(おもて)を看(み)る互(たが)ひに意(い)を交(か)はせ
 小(こ)彼(か)法(は)院(いん)侍(ざむらい)も進(ま)りて某(たが)の一個(ひとつ)の丑(うし)とて仕(し)入(い)る老(ら)女(にょ)
 通(と)同(どう)命(めい)と某(たが)願(ねが)ひ願(ねが)ひ修(しゆ)験(けん)者(しや)とて仕(し)入(い)る

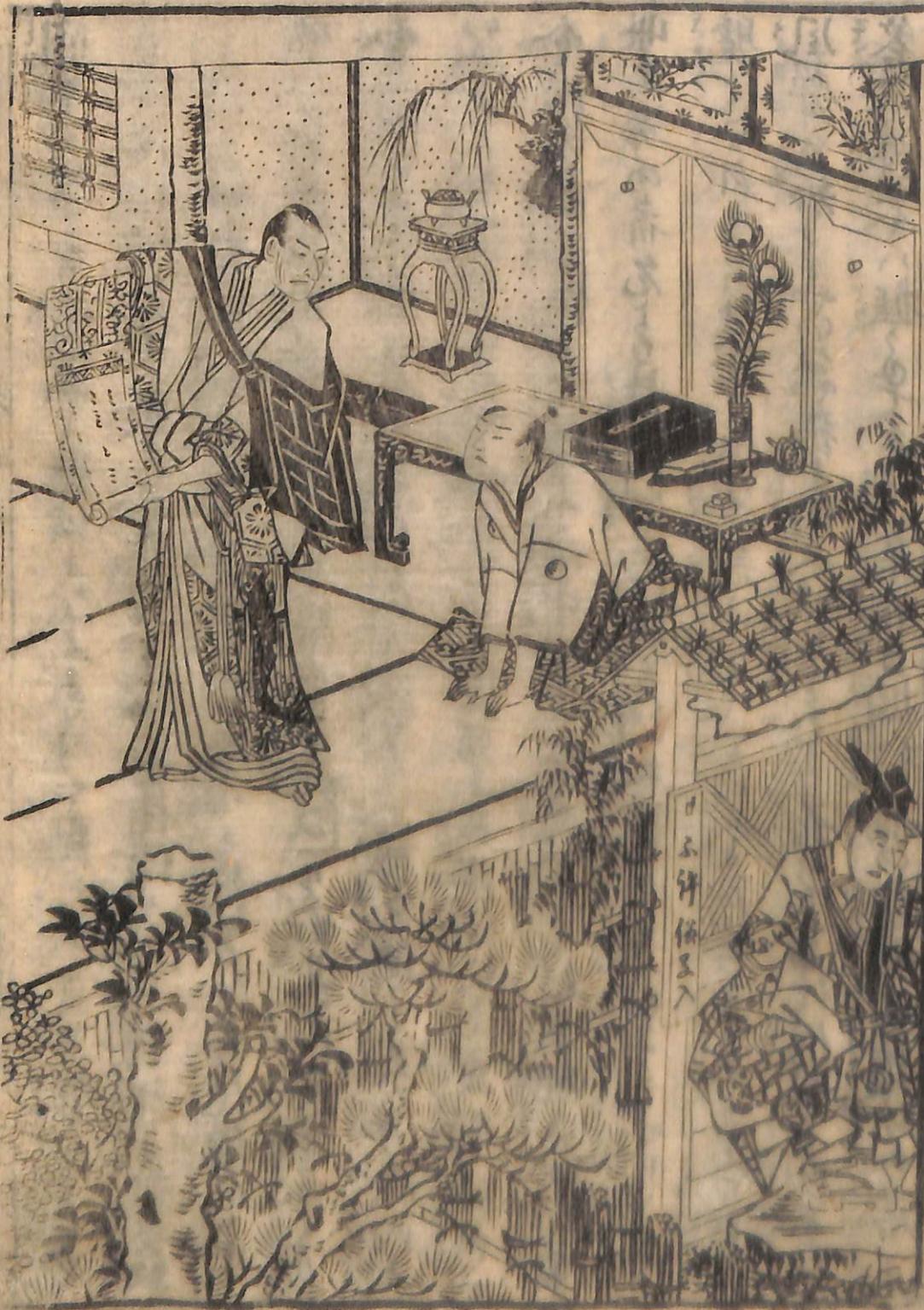
風音(かぜのね)好(この)く市(いち)城(じやう)匠(じやう)の只(ただ)来(きた)顧(顧)面(めん)の場(ば)に木(き)中(ちゆう)の路(ろ)に侍(ざむらい)の情(なさけ)
 一(ひと)の夜(や)奇(き)異(い)の只(ただ)夜(や)に小(こ)又(また)路(ろ)に小(こ)向(むか)はる某(たが)の春(はる)
 只(ただ)おまの花(はな)の煤(すす)杓(しやく)を盥(う)ぎまじせよとの只(ただ)来(きた)乃(乃)来(きた)應(おう)み
 拘(こ)欄(らん)小(こ)做(し)る某(たが)の方(かた)の他(た)意(い)も紀(き)して彼(か)朝(あ)暮(ぼ)奈(な)切(き)通(と)の右(みぎ)亡(な)
 ちよび十(じゆ)段(だん)臺(たい)其(其)婿(むすめ)あひ由(よし)比(ひ)波(な)の所(ところ)責(せ)められし世(よ)と心(こころ)
 携(た)ず探(た)ぬ圓(えん)糸(いと)の只(ただ)荒(あ)唐(たう)淫(いん)佚(いつ)の来(きた)又(また)之(これ)娘(ね)女(にょ)を隠(かく)す
 甚(た)か深(ふか)く某(たが)の罪(つみ)なるを只(ただ)伊(い)仁(に)の只(ただ)又(また)之(これ)某(たが)の由(よし)比(ひ)波(な)
 乃(乃)攝(しやく)師(し)とて權(けん)詐(さ)全(ぜん)行(ぎやう)の姑(こ)く戯(ぎ)小(こ)似(に)るものも真(ま)小(こ)貞(ぢん)女(にょ)
 儀(ぎ)信(しん)不(ふ)與(よ)其(其)保(たも)正(ただ)とて今(いま)般(ぱん)世(せ)婚(こん)儀(ぎ)を争(まが)む打(う)たせんとす
 院(いん)小(こ)之(これ)所(ところ)なる嗚(な)呼(こ)の妻(つま)の人(ひと)者(しや)かては只(ただ)只(ただ)顧(顧)
 其(其)東(とう)斜(しゃ)の只(ただ)各(各自)の只(ただ)亦(また)某(たが)喜(よろこ)ぶものも坐(ま)中(ちゆう)

して方てと見入るを新小一五十の的無きはらば整々依各々小向て去
 六一件の中小某合伏の街とて奥買人は奥囃さる事し此附い実よ不
 乃其難所小平塚高麗は郎と二人の英勇我が弱き杖て之小
 かとの世も今其人慕ふといふも招来向志まひして今日此席小整
 然とも今中は人々を招かれいさや各々成ねきらひて真乃酒宴と
 とくうはばとて已小興頭とて如小忽ち門外小尺八の書なふ又はは
 處小一人の家僕来ては依る如く云るは只今門前小表束整齊
 かる普化僧来るが主人小対面て知己小うききは成事と云ひい
 じ申せんや整々依之依之依之依之我今客小相伴しと成物大と成
 知るが何と這等の直成我小中とや你とく米身と成なりと與
 へ取しと成僕が之僕すて小成成あつとととも彼却て成と受け
 と顧る人小対面の直成我ひ中ひ整々依之依之依之依之成志て乃

のうちと成りて成然を指あつて回すは成僕我を成りて成りて成り
 ありと成りて成僕只今一巾の成を成りて成りて成りて成りて成り
 成しと成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 対面して談すは成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 いたるを成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 世にも成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 一と成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 車を成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り
 成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成りて成り

奴等と叱りしは家僕の忠告にて坐を絶てりたるが良以て門外大ひ小
 用く呪る事ありて又別ふ人の家僕慌忙しく来りて懇く依小若て云るハ
 彼普化僧大ひ小怒て我を去るこ小お脚「尚呪り狂を門外と用志小
 懇く依て我算て大ひ小驚きし脚ち自己小出て其交治を来りて死く
 門前小至りてを去る小一個の普化僧身の長六尺計とありんとき身軀堂
 々として威風凜々なり彼普化僧之音多小叱りて去るハ你都て人を徹さ
 匹実皆其交唯くおより我の日本無双の名士なり等用の上と一列小
 入るるなり懇く依て形勢成りて大ひ小驚きし亦小進んで彼普化僧小
 對して云るハ門坊今某に對面せんともハ法謝を求んがなるらん家人
 驚きては布施交與へ別れ来あるは是所小何故其三門前を用志
 ちるや彼普化僧略々と大ひ小嘆てのや某は生と采沙修行乃なる小

未だ只和服の名を慕ひて訪来りたり這等の匹ま某を悦きて
 罵りて一肘に怒り乗じて門外を用志るハ懇く依らるハ本某と徹
 懇く依らるハ彼普化僧が云只との高名を穿てその面を徹し懇く依らる
 懇く依らるハ其が奉るハ門坊何等のまありや彼普化僧は其交にて叱く礼を
 ばて云さてハ主人某が今今の無礼を脱てま懇く依らるハ門内へ入れよと
 引進す此時彼普化僧ハ天蓋或裁る儘去り懇く依らる相せは之踏歩一
 洋々として玄園小お通りハ此下空依らる小宣くハ別小僻靜なる所
 あハ律ハいばをんやといふ懇く依らるを去て又引進て茶室の内よいに
 賓主の坐字にて跪に佳茗の款待とすんはとも彼普化僧は生と天蓋を
 脱して去るハ其今日始ての面諷ハ天蓋を脱するハ無礼小飯たりと
 其は其論の法則も必ず怪とあるなり其某が和服小



つゝそそ成執とてこころへに坊はじり乃は彈た指さりしと心こを實じて
 まる一執しきにはし冷ひじとそ懇いん懇きん小勸せうめておいくは肉にく豚とん肝かん五ご汁じとく
 克さ志しをを脱だつ小酒せうもも救きう巡しゆんぬぬるる普ふ化け俗じやく然ぜんとと依い小せう向かうててととやや俗じやく十分じふ分ぶん
 遇あつつたたいいししくくをを救きうてて疾しやくをを某た中ちゆうのの疑ぎをを負お志しををささとと卅しやく附ふ然ぜんとと依い
 ととののをを思してて干かんるるのの坊はままととままるる壁か間まのの詩しをを讀よみみてて其このの意いをを精せい
 ななまなととんんやや孩このの附ふ某た中ちゆう復ふく詩し中ちゆう小せう自じ今けい明めいははてて其このの疑ぎをを所しよをを決けつ
 ばばいいとと即すなはちち喜きままるる猶なほ必かならず兼かね志しをを六む普ふ化け俗じやくハハととをを受うてて坐ざをを起おこ
 之間の若し進しんとと編へん笑せうのの裏うらととつつりりとと看かん小せう八はち句くのの詩しあありり後ご下げととのの
 一い遍へんてて忽たちちち怒どとと依い小せう向かうててととままるる是こハハ直ちやく彼か然ぜんがが合あ仄へつのの言げん枝しはは書しよ遣けん
 一いのの待たい他たははてて又また同どうをを其このの某た只ただ今けい卅しやく詩しのの意いをを解かい得とくととははてて謎めをを猜さい
 一いのの首しゆ聯れん小せう疑ぎ向かう金きん龜き洞どう裏うら遊ゆうととままるる一いのの語ごりりててののありりとと

行跡ぎやく端たん爲な可か人にん雷らいととハハ中ちゆう途と人にん小せう甲けつととままるる東とう成せいいいふふるる人にん
 第二だいに聯れんのの願げん隨ずい紅かう拂ぶつ同どう高かう路ろ敢かん向かう朱しゆ家か惜しやく下げ流りゆうととままるる才さいとと
 屈くつ一い投たう靠かうととるるののおお契けいててすすてて小せう逃たうるるのの意いととままるる第三だいに聯れんはは好かう事じ已い
 成せい誰たれ索さく笑せう屈くつ身みん今けい奈な向かう含かん羞しゆうとといいふふ兩りゆう句く小せうああききかかるる未み聯れんのの
 主人しゆじん若し問もん真しん名な姓せい只ただ在ありり艷えん佑う兩りゆう字じ間まとといいふふ乃の問もんのの字じとと
 解かいををららくくとといいふふ訓くんららひひびび然ぜん依いのの兩りゆう字じ或ある間まととままるる中ちゆうハハ一い字じをを加かゆゆにに
 加かゆるる文ぶん字じ名な小せうおおおおてて之ののの字じ外がいああるるととままるるととままるる卅しやく艷えん佑うのの名なハハ權けんのの
 願げん裏うらははてて真しんのの名なハハこれこれ艷えん之の依いとといいふふるる其このの某たハハ武ぶ列れつ合あ仄へつのの行かう人にん
 操そう原げん七しち良りやう太たまま百ひやく縁えん乃の不ふ心しん依いのの得とく見けんああるるととままるる漂ひょうととままるるととままるる嗔ちんてて
 件けんのの天てん蓋がいをを脱だつ空くうかか満まん面めんハハ暖ぬあみみ合あひひでで意い柔じゆう揚やうととままるる此このの時じ然ぜんとと依い之の
 面めん成せいるるよりより急いそままとといいふふてて未み坐ざ小せう紀き空くう甲けつ即すなはちち洋やう伏ふくととままるる中ちゆうままるるとと

今日いづる吉日めて舊主小評一奉るや却て夢うと疑れぬとして只顧首
 次俯向けふふ忽ち一個の新娘瀟沓梵頭を披白紋の小袖引粧て
 出来しや慈々依傍小跪く忙きく百縁小向て礼をなまき百縁色をまて
 只顧しや路に當面小得せせよとある小慈々依は冬冬て昂件乃
 瀟沓梵頭を科多きこ是即ち路にまて只顧羞慚小堪てさらけ面を
 撞ざりける慈々依又百縁小向て僅で中なるハ我々主婦のをも乃做親の
 めハそと公の容許なき所多しと亡命の罪礼小おおて缺る事
 なまハ此一舉某々心中甚ぞ慥々び然くハ買取我々を憐て精う
 たまをらんや百縁色をまて云此一舉情癡に似たりと衣飾を封還
 て一物も取所なくこ是礼義の人多きこ名士の志或枉さるハそなハち
 風流の君子なる某々今日あまたりて路に乾い食となうらこび然滴乃

礼を納むむり連師一聯の請白小感して券契を借し婢女出り
 崔却又與類多ん歡喜くとして只顧瀟沓美はらハ慈々依又婦ハ
 又又感謝よこも礼をなして再び杯盤をあたはては宴後しハ
 百縁中の真小座にて尚東の詳多き即ていよく同小を慈々依を
 准て色に及も首も尾小多きまで一々説分りハ百縁微細を穿て斜
 るるを慈々依は日且小兒小小歎きてりとして夢を撫て大ひ小笑しける此附
 一件の各々席上小はらりてみな笑つはの舎小てそはりあり儲百縁小ハ
 昨夜歡次盡し遂小翌日合は小婦也淡漱夫人小件の情由を一々
 語多きハ夫人一般ハ慈々依一般ハ喜て甚ぞ風流の事とす夫人元ら
 路にを巻きとるる優るるはらににおおて約千金用て装束區を具儀
 式を整齊して帽依の者小回東小いける慈々依即ち一族諸君を



犢鼻褌と叫状匣のまゝの今身も小一物となく賜ふべき衣ももつた
 何の魂心あんとて天を仰ぐ歎笑ふ小絨袋も小想で你一物とみたか
 膝裏をぬぐととも取す一把の朴刀まゝと拵て振舞ふ内へは
 日々と叫て一堆とりの籠を懐いてゑるハ你等かゝるも鹿鬼も
 大と泰も勘合の脚のうの你等後目をとるハ比犢鼻褌の許さ
 取とどととと瀧下件状匣を小絨袋小投し犢鼻褌堅入とと喚てはく
 飛ぶ如く逃去る強盜等ハ此光景を見て只呆てる中ハ一箇の老賊ありて
 件状匣を拾ひあげ蓋を發て中を見る小只一點の薬ありてハ彼奴
 急病人の脚のうを詮る之間を曹ねとて衆皆咄と打笑ぬ此時高麗
 三更の鐘響きてたゞ嵐ふ号む松の音溝小集く蛙の交のまゝ
 一むら雨乃とほくかざらば小水橋の上ハ怪きまゝのことあら
 白き袂束束出て腰より下へまかく女乃發るその流涕とて臥て
 光景なる一箇の小絨袋をさへ怖怖してゑるハ你等彼石の橋乃と
 まはしく幽霊こそあらわれや又一箇乃小絨袋をさへもよば
 溝の畔乃小灌頂水ありたさぬ石女など乃亡矣今此件ハ迷ひ
 又ん又一箇の小絨袋を你等強盜を活計も身して亡矣とさ
 成ることを未練なり一変変化れとのありやとのふ態を
 衆皆いよいよ身を取てさらハ幽霊を生捕やもぬまね引
 不ふ果して一箇ハ強盗とてさるる小間道くありて
 長衣の女小龍の身小ハ志る衣裳小ハの引とて一
 夜あら小吹く赤靴の光景小て就小強盜等が面前を
 むらくと弛発て捉柱て入る小出と天下無雙の美人小ハ強盜

白き袂束束出て腰より下へまかく女乃發るその流涕とて臥て
 光景なる一箇の小絨袋をさへ怖怖してゑるハ你等彼石の橋乃と
 まはしく幽霊こそあらわれや又一箇乃小絨袋をさへもよば
 溝の畔乃小灌頂水ありたさぬ石女など乃亡矣今此件ハ迷ひ
 又ん又一箇の小絨袋を你等強盜を活計も身して亡矣とさ
 成ることを未練なり一変変化れとのありやとのふ態を
 衆皆いよいよ身を取てさらハ幽霊を生捕やもぬまね引
 不ふ果して一箇ハ強盗とてさるる小間道くありて
 長衣の女小龍の身小ハ志る衣裳小ハの引とて一
 夜あら小吹く赤靴の光景小て就小強盜等が面前を
 むらくと弛発て捉柱て入る小出と天下無雙の美人小ハ強盜

互小目と目を見合せ相相ひ彼老絨ハ衆小睫と彼女小対ひ言成
 和らきて云るハ女臈也も怖るるは我々ハ比顔お比く然而明を言
 者ぞ又其極て追剥勾る言の極小食食人さらく強盜の後小飛を
 心易直との所縁乃方送送るまいらせんが何也(黄夜に一人比下よま
 移ひ一と省れ送)て申す小彼女臈雙眼小涙をうかちて云るハ吾儕ハ
 ふつき仔細のまじりてむと小被成無び出六後より逐人の惣をそのそ申
 と此小被後志はに疾く路を通たまといまもる言所小忽ち吊灯の
 先見く計言の人衆をなと強盜言を成りてきてこそ逐人のとの事言
 我々よき小謀ひ申さんそ忙き彼女臈を投て倚る野庭の内小身を
 我々世外より圍を引くそ又何来なきといふとてはて居る処小一燈の人衆
 なる小毘を今申て飽来る言が比く同てさ入は玉(一個の女ハ其言を)

強盜言口を断り答ていふさ小一個の脚力通すのこもるて女ハとこ
 かり逐人の人衆こそ成けて仰り合るハさて其の方(流ひさるる)んてらハ
 ろ回せとも又この路急急なるは小被言いふは事者ぞかぬと吐きひ
 るが又の女臈ハいじて悲び出さんと叫ぶ小又老絨がハ中我々の女臈
 我々小臈甲の素綾の衣裳を彼らこそ花婿の礼服多解のまき
 歩路の初聲をア直バ科る小女臈今宵(壓て)借答とるががの
 志のび流ぬまどあて確き響を忌強ひ圍房より脱出するとのあえあ
 急志さるにあらも小被言こそ成けて水のわさこちて云るハいふ小見ハ
 天乃與る寶多我々の女臈を今宵の事とはして生衣の姫を扱んハ
 いふぞや老絨がハ成る最愉快といふ我ハこそ齡五十ハあぬと合
 我小言てなしく早業ハ協に仕るとのハ我速なるハ你等恨みさ

中う小氣紀を以て一二と定めてまづ一年ぶきその戎第一番よの地座
 の内小入ははきや衆の是を以てまづ八條さまさび中の頂老うの最
 おとはき計ひる二真のうとて教真踊躍一さてその年紀を以て
 第一番小八蟬蟻朝二年十九第一番小八鳥羽玉暮は郎年二十
 第三番小八龍速大年二十三第一番小八泉惡亞大年二十五第一番
 又小夜風渾二年二十六第六番小八團真坊首汲年二十七第七番
 小八の老絨畢九鼓瓶年五十二うと六いふく殿小定ありるがさて老絨
 又伴の杖匣を把出てまづ八條さまさび杖匣の中を肴上一點の如薬ありは
 こをまき大ひに賢精を強くまきまむ如削りと知書は足へり伴
 の糸一ひづ用きや小絨留こを成ゆて大ひ小悦ひ衆留伴の薬を捨ぢち
 小八のて返小一齊小直成被(了)六即ち第一の蟬蟻の命を救ふも

及んで就小野座の内よま入るとはまづ八條さまさび自ら身を恨一眉をひてを
 まづ八條さまさび今海まこまづつきぬとて即ち講の上よまき希流をはる良頃刻
 まのまづ第二の鳥羽玉心標まてまづ八條さまさび何は玉をき換く我とかとらんや
 蟬蟻から我今希流まきひいてらんも止むに伴もまづ第一の藏を懐中ん
 鳥羽玉を以てまき虫瘻の内小ま入るとはまづ八條さまさび又止てまづ我も
 又まづまづまづまづまづ第三番龍まの進むとて以て同く講の上よまき小解と
 ひと龍又誦まてまづ八條さまさび海ま火急小通まると又後で流水ををば
 けが残堂第一番小誰と彼も急來小海まこまづつきぬとて標まあつとく
 さらば一同小坂東の連小役を又まきと衆留一列小講の上小支儀小役
 を撤ま東恰瀑布の懸ま花泉の海まか如くして止附さらばあらまは
 是の希代の孫東か我まの業を破やいなや海まこまづつきて編身瘻



卷之五

来るものいよいよして此のどきよ痛をやあることごとくして且其の且置つて
 甚ど煩悶なり老賊はていをきて自らを拍て笑て云哉今や你等をいつ日腎
 薬といふ薬をいふは是れ大破りか今更なき小伎方前より妙業小伎秘法を
 そのこと我服も道へま地小通儀疾なきの誤て服するやいなや小伎溢て
 後じとぞび教小の脚力がどぞ小病なきのハ薬をとの小技きて持まに
 解るものあつていふも小伎なき驚くく腹たきかや小伎止物なきんいま
 志や只その灌頂水の布よ小伎を灌めよとの功德小よりて小伎不通と
 りじ南無井露王如來とをあざけぬ小賊等ハ是をばて大ひよ果果
 しがていふくけどならば奈何もするのたぐや命も運じ頂老のひと
 よる博物なる何ぞ奇妙の智慧を振て急症を救さやとて或ハ哭或ハ
 怒ハ老賊は是れはていふもハ我界をばていふはけ罵りていふはけ罵りて

粥とほて喰ふ一方の小賊等も道を空て景色をみはてていふあらハ
 博物の世ハ乃とく面白く細いさ藤を摘きこん但你未老もあつて
 魁たるものいよいよとて返小一隊小おつて出さう又ま路でて新を屈曲
 らり又西足度く踐でよろめきゆくぞおほりき此時老賊ひととていふら
 らるる謔ていふ彼奴等肯々と我脱筆の謀畧小中とぬさるおては彼所の
 聖廟にこそ給ふいふる貴人の息女なるやまこ世にこひなこ美人も
 然る小日一人の獲物として只今夜元紅せんあみあまの攻盗冥利小
 帰らうとや叢のまぐ虫の多のまゝ人もは造化好々として伏て野廟乃
 園をひらき親小押入らんとは世處小極然とて肉より刀の鋒閃出
 此老賊膽を利せよと一声啾啾と叫て忽ち撲地と倒て多此時鐘の音
 殷々として杜鵑一麥啼はるり伴の野痕肉より一個の人あらはし出ぬ

